

第8回高校生カンボジアスタディーツアー ニュースレター

立教女学院高等学校 Rioko M.

【今回のツアーに興味を持ったきっかけ】

中学1年生の時、先輩が学校でユネスコ協会連盟が主催する「書きそんじはがきプロジェクト」の説明をしてくださった時のことです。「はがき 14 枚で一人の生徒が1か月寺子屋に通うことができます。」この言葉に私は衝撃を受けました。世界には教育を受けることさえ困難な子どもが沢山いるという事実を何度か耳にしたことがありましたが、その子どもたちのために協力できる手段があると知ってこの事実をよりリアルに感じる事ができました。この時から私は、書きそんじはがきプロジェクトに家族で参加しているのですが、寺子屋に通うことのできない子どもたちのために私たちができることを行っていきたいと一層強く思うようになりました。今回のスタディーツアーは、私たちができることを考えるにあたり、まずは寺子屋を含め「教育の現状を学ぶ」ことを念頭に置いて臨みました。

事前学習として一つ目に中退率の高さ、二つ目に「教育を受けられない→職に就けない→お金がない→教育を受けられない」という負のサイクル、この二つに注目して調べました。しかし、実際カンボジアを訪問してみるとインターネットや文献では学ぶことのできない教育の現状がたくさんありました。その中でも私が、特に心に残った伝えたいことをニュースレターという形で紹介させていただきます。

【カンボジア日本国大使館】

まず、カンボジア日本国大使館に訪問した時のお話をさせていただきます。大使館では、カンボジアの教育を巡る課題や、日本による教育支援について具体的に伺いました。特に印象的だったのは、日本が協力した地雷撤去のお話です。1967年に始まったベトナム戦争をきっかけにカンボジアには、たくさんの地雷が埋められていました。日本は、ODA（政府開発援助）によりカンボジアの地雷撤去のため、技術などの面で大いに貢献しました。この影響もあり、日本とカンボジアの親交はとても深いです。しかし、私が印象的だったのは、この後のことです。カンボジアは今、日本から学んだ地雷撤去の技術を自国のためだけで



なく、ウクライナなど地雷問題で困っている国のために用いています。実際に現地に行き、地雷撤去の技術を伝えています。私は、このような自国の利益のためでなく互いに助け合う世界の姿勢が国際協力だと思いました。これこそが平和な社会に繋がると感じました。

【日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所】

次に、日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所訪問時のお話をします。ここでは、日本ユネスコ協会連盟が行っている世界寺子屋運動のアンコール寺子屋プロジェクトについて伺いました。寺子屋とは生活の質を向上させる基礎教育を提供する公民館のような施設です。基礎教育を提供するだけでなく、地域コミュニティの発展も助けています。教育のギャップを埋め、基礎教育や高等教育を受ける機会に恵まれず周縁化されてきた人々を援助する目的で建てられています。私が驚いたのは、寺子屋で教育を受けている生徒の年齢層です。寺子屋には、幼稚園クラス、復学支援プログラム（小学校）、中学校クラス、識字クラス（大人）とクラスが沢山あり、幼稚園生から大人まで幅広く教育を提供しています。中でも私は、大人向けのクラスがあることに疑問を覚えました。話を伺うと、これには深いわけがありました。カンボジアは、1970年代ポル・ポト政権で大虐殺がありました。指導者のポル・ポトは、共産主義者でした。資本主義の社会が広がることを恐れて、教員を含めた知識のある人を虐殺し、学校を焼き払ってしまったのです。ポル・ポト時代の歴史的背景により、現在カンボジアでは、字を読むことができない大人が数多くいます。このような人々のために作られたのが識字クラスです。今回のツアーで私も訪問したのですが、字の読み書きを中心に特に女性の大人が多く学んでいました。私は今まで字が読めない生活を考えもしたことがありませんでした。識字クラスに通う女性はこのように話してくださいました。「字が読めないと買い物も不自由ですし、どの薬を飲めばいいのかもわかりません。しかし、今私が寺子屋に通う一番の理由は、子どものためです。私が字を学んで子どもに教えてあげたい。また、子どもにどの薬を飲ませたらいいかわかるようになりたい。」このお話を聞いて、字が読めないことが、どれだけ困るか気づかされました。また、子どもの生活のために学ぶお母様の気持ちの強さに改めて教育の大切さを実感しました。そして、非識字率の高いカンボジアですが、これから

識字率がどんどん上昇していくといいなと思いました。教育水準にも大きくかかわってくる識字率ですが、近年、寺子屋活動の影響もあり、非識字率が急激に下がってきています。しかし、現在も6人に1人の割合で字が読めないという現状です。（下の識字率に関するデータを見てくださると嬉しいです。）



成人の非識字率の変化

- ・1998年（46パーセント）→2008年（32パーセント）→2023年（18パーセント）
- ・紛争の影響で中退率が65パーセントと非常に高かったが、現在は約16パーセント

※データは日本ユネスコ協会連盟のものです。

【リエンダイ寺子屋】

最後にリエンダイ寺子屋を訪問した時のお話をさせていただきます。私は、学校に通えない子どもたちのための復学支援クラスに伺いました。そこでの子どもたちの発言は、今でも鮮明に覚えています。「勉強をできて**幸せ**。」「将来は、警察官になりたい。」「私は学校の先生になりたい。」そうキラキラした笑顔で前向きに素直な気持ちを語る子どもたちを見てとても驚きました。私は、事前学習として寺子屋について学んだ時、あらゆる事情で学校に通うことが難しい環境にいる子どもたちがここまで活気にあふれていることを想像していませんでした。しかし、私たちが子どもたちに質問をするといつも積極的に楽しそうに答えてくれました。そしてどの答えも誰かの幸せのために働きたいから学びたいという思いが詰まっていた。また、子どもたちは今、寺子屋に通うことができ学ぶことに喜びを感じていました。自分が置かれている環境に感謝し、必死に学び将来誰かに還元したいと語っていました。私は、そんな子どもたちの姿を見てふと自分の小学生時代を思い出しました。私は、小学生のころ学校に通えることが幸せと思う機会があまりありませんでした。学びたいという気持ちより、何のためになぜ学ぶのかということの意味を探していました。このことから、カンボジアの子どもたちの言った「幸せ」という言葉が耳に残りました。寺子屋に通う子どもたちの自宅も訪問させていただいたのですが、扇風機ひとつで暑い中、何家族も集まって暮らす姿を見て日本との違いに衝撃を受けました。長男とお父様は、お金を稼ぐために都市のプノンペンに出稼ぎに行っているのだから何とか寺子屋に通えていると知り、それでも「幸せ」と心から言っていた子どもたちの姿を思いだして心が動かされました。「幸せ」に対する価値観は人それぞれ違うことを改めて実感するとともに、誰かの幸せが自分の幸せだと幼いながらに考えるカンボジアの子どもたちの強い気持ちに心から素敵だなと感じました。そして、子どもたちの願う「誰かを幸せにするための学び」のために私ができることは何でもしたい、子どもたちを幸せにすることで私も幸せを感じられるようになりたいと切実に思いました。



【帰国後感じたこと】

私は、今回のツアーで、カンボジアの教育、歴史、文化など様々なことを体験し知ることができました。実際に訪問し様々な人からお話を伺うことで文献やインターネットでは学ぶことのできない現状を知ることができました。ニュースレターでは、特に印象的だった教育のお話をさせていただきました。最後のリエンダイ寺子屋訪問で感じた「幸せ」については今でも深く考えています。私もカンボジアの子どもたちのように誰かの幸せに貢献するために生きていきたいと将来を深く考えるきっかけになりました。私は、これからもカンボジアの子どもたちのためにできることは何なのかを模索し続けたいと思います。そして、ニュースレターという形以外でも、今回のツアーで学んだことを積極的に伝え発信し続けていきたいと思っています。

最後に、今回のスタディーツアーを支えてくださったすべての人に感謝を伝えたいです。このような学びの機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。



【皆さんに参加してほしいプロジェクト】

最後に、みんながカンボジアの子どもたちのために参加できるプロジェクトを紹介します。

書きそんじハガキ
17枚

未使用切手
900円分

プリペイドカード
900円分

1人がひと月 学校へ通える！
(※カンボジアの場合)

日本ユネスコ協会連盟が行っている「書きそんじはがきプロジェクト」です。皆さんの寄付で子どもたちが寺子屋に通えるようになります。(写真の出典：日本ユネスコ協会連盟 ホームページ)